

# 世にも奇妙で怖い話(リ ニューアル版)

イシオカ セイジ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この世の中には不思議と未知で溢れています

それは私にも、もちろん… 貴方にも

さあ、行きましょうか…未知の世界に

# 目次

1 皿目 様隠し	2 皿目 8 日目の鏡
6	1



## 2 皿目 8 日目の鏡

「このお話は僕の親友から聞いた話である」

僕の友達の A ちゃんが通っている高校はごく普通の高校だ、ただ一つだけ、他と違う点がある、それは…

「高校の校舎内」

私の高校で最近変わったことがあるそれは…

「ねえ、聞いた？ 体育教師の佐藤先生の話」

「聞いた、聞いた、あの話本当だったんだね」

女子が話している事と同じことなんだが、みんなが知っている学校の七不

思議、トイレの花子さんやベートーヴェンが歌いだすことなど、だが、うちの高校では「学校の八不思議」と言われている

では、もう一つは何か、それは「呪いの鏡」だ、女子トイレのどこかの鏡

それを見ると「8 日目に必ず死ぬ」と言われている

話を戻すと体育教師の佐藤先生は3日前から体調不良で休んでいる、それで、みんながさわでいると言うことだ

「ねえ、Aちゃん、佐藤先生大丈夫かな？」

私のお友達のBちゃんがやってきて聞いて来た

呪いの鏡のせいで生徒が一人亡くなっているのだ、このままだと皆んなも危ない

「大丈夫だよって言えないよね、呪いの鏡を壊せばみんな解決するんだけど」

私は考え込んでいると、Bちゃんが私の手を取って

「じゃ、今夜、学校に忍び込んで鏡を壊しに行こうよ」

Bちゃんの目は輝いていた

「待って、壊すって言ったって何階のどの鏡が分からないのよ」

「大丈夫♪私に考えがあるから……じゃ、今夜学校でね♪」

Bちゃんはそう言って走って教室のに行ってしまった

（しっ、心配だよ、でもBちゃんを信用するしかないよね）

〜夜の学校〜

私達は学校の門の所で、落ち合い、無事、校舎に入る事に成功した

「で、Bちゃん、作戦でもあるの？……本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だって！いい、呪いの鏡には鏡を守る幽霊が居るって言われているのだから、そ

の幽霊が居る鏡が呪いの鏡よ」

Bちゃんは胸を張って言った

「つて、どこでそんな情報を得てきたのよ！」

「まあ、いいから…さあ、行きましよう」

こうして呪いの鏡を探し始めました、私は一階からBちゃんは一階から女子トイレに入り一枚ずつ探していききました

「どうあつた？」

「ダメ！みつからないわ」

（そんな！どこにもないなんて…変ね）

私は暫く考え込んでいました、薄暗い廊下で、そうしてある事に気がつきました  
「ねえ、佐藤先生つて、あの時、どこのトイレに入ったっけ」

「えっ、どう言う事？」

「だ、か、ら、佐藤先生が休む前日、体育か最後の授業だったじゃない

と言うことは」

するとBちゃんも私と同じ事に気づいたようで

「佐藤と同じ行動を取れば、呪いの鏡にたどり着くことが出来る」

　　校舎外のトイレ

公園のトイレと同じ形式で学校の外にもトイレがある、外で授業がある時は、このトイレを使用することがある

「佐藤先生、体育の後、このトイレを使ってた」

私達は恐る恐る女子トイレに入った

「どう、幽霊いる？」

「いないみたいね」

私達はハツと胸を撫で下ろす、念には念でもう片方を確認した、が幽霊はいなかった

「じゃあ、出よつか」

「そうね」

私達が振り向く直前、鏡に髪の毛の長く、白い服を着た女性が私達の間立っていた

「ねえ、Aちゃん…これって」

「うん、ここだったね」

私達は恐怖で動けずにいた、幽霊は私達の肩に手をそーつと置いた、しかもその手は

骨だけだった

(もう限界)

私は恐怖の限界で持っていた懐中電灯を鏡に投げつけた

パリーン

「Aちゃん…すごい」

「あつ、ごめんなさい鏡割っちゃった」



「それでいいのよ…それが目的なんだから」

こうして私達と呪いの鏡の物語は幕を閉じた

暫くして、体育の佐藤先生も無事に職場復帰して万事終了した

く後から聞いた話だとあの鏡は昔、ある職人が恨みを込めて作り内の学校に送られて来た

呪いの鏡とは知らずに

もしかしたらまだどこかに残っているのかも知れません

…もしかしたら貴方のお家かも…

# 1 皿目 様隠し

「このお話は僕が高校生の時、友人Aから聞いたはなしである」

友人Aの友達、友人Bは田舎暮らしだったらしいんだが、その田舎の神社で神隠しに  
あいそうになっただけらしい

「学校」

「で、その話って本当に神隠しにあったのか？」

友人Bは田舎の学校で、自分が住んでいる所で神隠しにあった話を聞いた

「本当だつてば、少し前なんだが、小さい女の子が霧の中神社に入って行って帰ってこなくなったらしいだよ、お巡りさんが探して行って暫くすると女の子は帰ってきたのにお巡りさんがまだ帰ってこないだつて」

友人Bは話を聞いて席を立った

「よし、今からその神社に行つて確かめてくる！」

「おい！よしとけて、お前まで帰つて来られなくなるぞ…あいにく今日は霧が濃くなつてららしいし」

（けど、このままじゃ誰がお巡りさんを探しに行くんだよ！）

俺は行くか行かないか考えていると

「私も行くー！」

声の方を向くと友達Cが近づいて来た

「私もお父さんを探しに行くー！」

彼女の目は強い決意が宿っていた、俺は彼女と一緒に神社に向かうことにした

→神社へと繋がる道→

この道は神社へと繋がっていて村の人はみんなこの道を使っている

途中、看板がありその方角通り通れば神社に着く

「よし、じゃあ行くか」

「うんー！」

俺達は神社へと歩き出した、

「こっちだな」

最初の看板はすぐ近くにあり看板の矢印通りに通った

→暫くして→

「ねえ、まだ次の看板は無いの？」

「あれ？おつかしいな？もう着いてもいい頃なのに」

俺達が異変に気付いた頃、前方から次の看板が霧の中から出てきた

「あ、やっと見つけたよ……次はこっちだね」

友人Cちゃんが看板の矢印の方に歩き出した時

「待って！こっちに行こう！」

「えっ、どうして、矢印はこっちなのに？」

俺は辺りを見回して行つた

「変なんだよ、ココ、霧が濃いし、もしかして誰かがイタズラで看板をずらしたかもしれないし」

「本当にそうなのかな？」

俺はこの時、言った事に確信はなかったけど、この看板の矢印を信用して行つても神社に着く可能性は低いと歩いていて思ってしまった

「物は試しだ、行ってみよう」

「うん、分かった」

暫く歩くこと次の看板を見つけ矢印の反対を歩き、それを繰り返して行くと、神社に着く事が出来た

「あつ、お父さん！」

神社の狛犬の像の所に寄りかかるようにして座っている人が居た

「もしもし大丈夫ですか？」

念には念を入れて脈を測る

(脈はある、けどどうしてこんな所で寝ているのか？人の気配は無いのに)

「大丈夫、君のお父さんは寝ているだけだから」

俺はお巡りさんを腕を俺の肩に掛けた時、友人Cは不思議な事を言った

「ねえ、神社の中から念仏が聞こえてくるんだけど」

「えっ、神社の中には人は居ないはずなんだけど」

そう、この神社は少し前に取り壊しが決まっっていて、人は居ないはず

「あれ？なんか眠たくなってきた」

そう言い友人Cはその場で座り込んでしまった、

(念仏って俺には聞こえてこないのに…霧がだんだん濃くなってきた、2人一緒には帰れないぞ)

その時だった、おれの耳にも念仏が聞こえてきた

「南無阿弥陀仏…」

何故かその声を聴くと意識がだんだん遠のいてきた

(マズイ、このままだと俺まで寝てしまう)

諦めかけた時、遠い意識の中、俺を呼ぶ声が聞こえてきた

「おい、大丈夫か？」

「つて、なんでお前たちがここにいるだ？」

やって来たのはクラスで話した友人達だった

「そんな事より早くここを離れるぞ！」

こうして俺達3人はなんとか神社から帰ることができました。

友人達は俺達のことか心配で来てくれたみたいです。

友人Cは無事、お父さんと再会できてとっても嬉しそうでした。

その後から聞いた話ですと、あの神社では、神主が昔、自殺してやってきた人達を神隠しにあわせていたのではと言われています

こうして俺達の神隠し事件は幕を閉じました